特　集
辞書指導と語彙指導

辞書の発音表記と発音指導

南條健助

本稿では，英和辞典や英英辞典などの発音表記との関連で，よりよい発音指導のために 3 つの提言を行ないたい。紙幅が限られているため，さっそく本題に入ることにする。

■発音表記を確認し直そう

教員も，折あるごとに，辞書で発音表記を確認し直すことをお勧めしたい。英米の英語発音は，ここ数十年間で大きく変わってきた。また，ALT との授業が増え，教室で様々な発音が聞かれるようになった。したがって，発音表記を改めて確認してみると，意外な発見があるかもしれない。その点で，筆者が発音表記を担当した『ジーニアス英和辞典 第 4 版』(G4) には，英米の辞書にもまだ載っていないが，すでに一般的になっている最新の発音や，日常会話などでしばしば耳にするくだけた発音，さらにはよく用いられる非標準的な発音まで，今日，英米で実際に使用されている発音が豊富に盛り込まれており，ご参考になるものと思われる。

例えば，以前，ある高校の先生から，ALT が especially を expecially のように発音するが，そのような発音もあるのかというご質問を頂戴した。これは標準的ではないが，よく知られている発音であることから（数年前に，expecially という発音の使用について，全米で方言調査が行なわれたことがある），G4 では《非標準》として /ɪks-, eks-/ という発音も載せておいた。ALT との授業において，生徒がこのような発音を実際に耳にしている以上，教員は ALT が用いた発音が標準的であるか否かを調べて，必要に応じて生徒に指導しなければならない。こういった情報を載せている英和辞典は，大型のものも含めて G4 だけであり，お役に立つものと信じる。

また，発音表記を改めて確認してみると，教員でさえ間違って発音を覚えていた語が見つかるかもしれない。例えば，NHK『ラジオ英会話』テキスト2008年 8 月号 p. 24において，That'd be great. という英文の発音が取り上げられている。そこでは「子音の連続」と題して「That'd は /t/ 音を飲み込むような音になり，すぐそのあとの /d/ につながります」（ママ）といった誤った解説がなされている。おそらくは t'd という綴り字に惑わされた誤解であろう。実際には，/t/ の音と /d/ の音の間に弱母音 /ə/ が入るため，/t/ の音と /d/ の音が連続することはない。これは，辞書で that'd の発音表記を調べれば，すぐに分かることである。

■「聞こえ方」を教えよう

辞書の発音記号は，子音や母音の音素（phoneme）を表したものであって，実際には，同一の発音記号であっても，語の中での位置や，前後にどのような音がくるかという条件によって，様々に異なった音で発音される（特に，/t/ の音や /l/ の音が顕著である）。教室では，CD などを手本にしながら，「聞こえた通りに真似をして，発音してみなさい」といった指導がなされているが，辞書の発音表記（カナ表記を含む）と実際に聞こえる発音との間にギャップがあるため，生徒

は内心「そう聞こえるのは，自分の耳のせいではないか」などと戸惑い，聞こえた通りに真似をすることをためらう傾向がある。これでは，いくらCDを聞かせても，生徒の発音は良くならないし，聞き取り能力も向上しない。そこで，それぞれの語が実際にはどのように聞こえるかという一つの目安として，「聞こえ方」を教える必要がある。

例えば，dullという語は，発音表記では/dʌ́l/であり，［ダル］というカナ表記を併記している英和辞典もあるが，実際には［ダル］ではなく［ドウ］のように聞こえる。そのような「聞こえ方」を知らなければ，［ドウ］という発音を何度聞かせても，それがdullであることは分からないであろう。逆に，一旦「聞こえ方」を知れば，次からは［ドウ］と聞けばdullであることが分かるはずである。したがって，生徒には，語を覚える際には，実際に聞こえた発音をそのまま耳に残し，綴り字を覚えるのと同様に，「聞こえ方」も覚えてしまうように指導することが大切である。かつて筆者も［エクセデス］という発音を聞いて，すぐにそれがexodusであることが分からなかった経験がある（G4では，第3刷（2008）で《米+》として/éksɪdɪs/という発音を追加した）。近い将来，例えば《◆［ドウ］のように聞こえることがある》といった「聞こえ方」の注記が入った英和辞典が出現することを期待したい。

■どうすれば音が出せるのかを説明しよう

言うまでもなく，辞書の発音表記は，発音の仕方そのものは教えてくれない。かつて「表記を変えても生徒の発音は変わらない」と言った人がいるが，至言である。いかに工夫された発音表記であっても（カナ表記を含む），その表記が表している音をどう発音するのかを知らなければ，何の役にも立たない。発音の仕方を教えるのは教員の役目であるが，発音指導においては，英語の母語話者が，どのようにして音を出しているのかという記述だけではなく，日本語の母語話者は，どのようにすれば音が出せるのかという具体的な方法まで説明する必要がある。

一例として，ring, song, youngなどの/ŋ/の音について考えてみよう。この音は日本語においても用いられる。「サンカ」（参加）や「マンガ」（漫画）など，カ行またはガ行の音の前にある「ン」が/ŋ/の音である。ただし，日本語の「リング」や「ヤング」と異なり，英語のringやyoungは，綴り字にgの文字があっても，/ríŋ/や/jʌ́ŋ/のように，/g/の音は発音されない。最後の「グ」は余計である。まず，この点を生徒にきちんと理解させる必要がある（もっとも，15世紀頃までは，このような/g/の音は発音されていたし，イングランドの一部には，今でも/g/の音を発音する話者が存在する）。

そこで，/ŋ/の音の発音の仕方であるが，例えば，竹林滋・斎藤弘子『ルミナス英和辞典 第2版　つづり字と発音解説』（研究社，2005）には，「舌の後部を上あごの奥につけて声が口へ出ないようにし，鼻の方へ声を通して発音する」(p. 17)と書かれている。なるほど英語の母語話者がどのようにして音を出しているかという記述としては正確であり，分かりやすい。しかし，「舌の後部を上あごの奥につけて」と指導され，それができるようであれば，その生徒はすでに音声学者である。同書のような記述で終わってしまえば，一般の生徒は/ŋ/の音を出すことはできない。

では，日本語の母語話者は，どのようにすれば/ŋ/の音が出せるのであろうか。筆者の教え方は簡単で，「頭の中では『ング』と『グ』を発音するつもりで，実際には『グ』を言う直前で止めればよい」というものである。上で述べたように，「グ」を言う直前の「ン」は，そうしようと思わなくても自動的に/ŋ/の音になるため，この日本語のクセをうまく利用して，いわば舌を「騙す」わけである。一度この教え方をお試しいただきたい。

（なんじょう　けんすけ・桃山学院大学国際教養学部准教授）